

2 徳島を高齢化と過疎化対応の先進地域に

●2045年には、阿南・鳴門・小松島・松茂・北島・上板の人口がいなくなる？

国勢調査が始まった1920年の徳島県の人口は67万人でした。その後、戦争中の一時期を除いて増加を続け、1950年には調査開始以来最多の88万人を記録しました。

その後日本は高度経済成長期を迎えますが、当時の徳島県には大勢の人を雇える（雇用吸収力のある）産業が少なく、大都市圏などに仕事を求めたことから人口の流出が進み、1970年には79万人に減少しました。

1970年代に入ると、県外へ出て行く人が減ったことなどから、人口は再び増加基調となりました。そして、1985年から1995年までは83万人台で安定していましたが、その後は死亡数が出生数を上回る状態となったこともあり、2010年に80万人を下回り、2015年10月の国勢調査では75万5733人となっています。

今後の見通しですが、2018年3月に国立社会保障・人口問題研究所が発表した2045年までの地域別推計人口によると、日本の総人口は2015年の国勢調査の

1億2700万人から1億600万人へと、約2100万人、16%減少しますが、徳島県は76万人から54万人へと22万人、29%も減少する見込みとなっています。これは、2045年には阿南市・鳴門市・小松島市・松茂町・北島町・上板町の現在の人口に相当するだけの人がいなくなることを意味します。

人口が少なくなれば、働く人の数が減りますし、また、モノやサービスを買う人が減って、経済活動の縮小につながります。

そこで、人口減少による労働力不足を補うには、昔に比べて元気な高齢者の方や女性ももっと活躍できるような社会の仕組みをつくっていく必要があります。また、外国人の労働力の活用も考えられます。徳島県内でも、農業や介護などの分野で外国人が働いていますが、人数はまだまだ少なく、国全体としてどこまで受け入れるべきかが大きな課題となっています。

このほか、新たな技術を進化させて世の中の自動化を進めることも必要です。パソコンやスマートフォンの普及で私たちの生活は非常に便利になりましたが、これらを動かそうとするにはヒトが手間をかけて操作する必要があります。しかし、ロボットやAI（人工知能）などの新たな技術を活用することでこうした操作が不要となり、今後どんどん自動化される世の中になっていくでしょう。「車の自動運転」がその一例です。

ロボットやAIなどの活用によって、高齢化や人口減少にもしっかりと対応できるよ
うになると考えられます。この恩恵は、徳島のような高齢化・人口減少の先進地域ほど
大きいと思われます。

●急速に進む高齢化

人口減少とともに、徳島県は全国的に見てもさらに早いテンポで高齢化が進んでいる先
進県であるといえます。2015年の国勢調査によると、65歳以上の高齢者が人口に占
める割合を示す老年人口比率は31%と、全国第5位の高率となっています。

徳島県人口の将来推計を見ると、65歳以上人口も2020年から2025年にかけて
ピークを迎え、以後は減少に転じる見込みですが、医療・介護へのニーズがより増大する
75歳以上は、2020年以降も当面の間、増加が続く見通しとなっています。

高齢者の福祉に関して、徳島は介護が必要なお年寄り向け施設の人口あたりの定員数が
全国2位と比較的充実しています。もっとも、夫婦だけの世帯で介護する人もお年寄り（い
わゆる「老老介護」）というところも多く、福祉・医療の面から将来を見すえた対応が急
がれています。

●徳島の医療態勢の充実度は高い？

徳島の人口あたりの病院数、一般診療所数、歯科診療所数および病院病床数は、いずれも全国上位であり、また、人口あたりの医師数や歯科医師数、薬剤師数なども全国トップクラスです。

こうした医療環境の充実ぶりは、地元大学の貢献が大きいいえます。徳島大学には医学部・歯学部・薬学部があり、特に医学部は、1973年に愛媛大学に設置されるまで四国内で唯一であり、長きにわたって人材を輩出してきました。

このように、徳島の医療環境は整っているように見えますが、東部圏域以外の地域では医師数の減少が顕著であり、特定の診療科目で深刻な医師不足が生じて、しばしば問題となっています。

ところで、民間病院だけでは担うことが難しい、地域医療の基幹病院として、公立・公的病院の役割は重要です。県立中央病院は2012年10月に改築され、



ドクターヘリ ©関西広域連合広域医療局



救急医療や災害医療の拠点病院として、県下全域を20分でカバーできるドクターヘリや高度医療に対応した先進的医療機器を新たに導入しました。さらに、隣接する徳島大学病院と一体的に機能させる「総合メデイカルゾーン」の機能強化が図られています。

●県民あがての糖尿病対策

徳島は、糖尿病による死亡率が長期間ほぼ全国ワーストとなっています。その原因については諸説ありますが、公共交通が十分でなく、マイカーが中心で歩く機会が少ないことに加え、一食あたりの量が多いことによるカロリーオーバーや、濃い味付けや甘いもの好き、野菜の摂取量が男女とも全国的にみて少ないなどの点が言われています。また、糖尿病の専門医が少ないことや、糖尿病の初期段階での受診率の低さ、患者の状態に応じた医療機関の連携が不適切であることなども要因にあげられています。

徳島県は2005年11月に「糖尿病緊急事態宣言」を出し、これまで県産食材を用いたヘルシー阿波レシピの考案等による生活の改善や「阿波踊り体操」の普及など、生活習慣病予防に向けた幅広い県民運動等も併せた取り組みを展開してきました。

さらに、糖尿病啓発を目的に、「青」でライトアップされた施設を目指して歩く「ブルーライト・ウォーキング」や、スマートフォンアプリを活用し、健康イベントに参加すれ

ば賞品と引き換え可能なポイントを獲得できる「とくしま健康ポイントプロジェクト『テクトク』」など、「運動」に焦点を当てた予防策を行っています。世界中で糖尿病患者はどんどん増えていきますので、徳島が糖尿病克服先進県として、世界のモデルになる日があればいいですね。

●生き生きと年をとろう

お年寄り（シニア）が元気で、生き生きと暮らす社会を実現するためには、年をとっても、社会・地域貢献などの生きがいや働きがいを見い出せるような社会にしていくことが大事です。

全国各地で多種多様なボランティア活動やNPO（特定非営利活動法人）活動などの市民活動が盛んになっていますが、徳島はNPOの活動が活発で、人口あたりの数は全国でも高水準にあります。NPOは、自発的、主体的に、公益的な活動を、利益を上げることがを目的とせずに行う民間の組織のことで、徳島では、保健・医療・福祉や社会教育、まちづくりの推進、環境保全を図る活動などが多く、お年寄りもたくさん参加しています。

一般に65歳以上を高齢者と呼んでいますが、最近は元気な方が多く、高齢者が思う高齢者とは、70歳以上のようなようです。近い将来には75歳以上を高齢者と呼ぶようになるかもしれ

ません。裏を返せばその年齢までは意欲的に活発な行動ができると考えているわけです。

こうした新しい価値観を持つシニアの生活になくはならないもの、シニアの生活をより豊かにするもの、より楽しむためのものなど、徳島の企業から、シニアマーケットを意識した新しい商品・サービスが生まれてくることを期待しています。

医療・福祉などへのITの活用も重要なキーワードです。患者さんの映像を実際に見ながら診断を行う遠隔地医療、一人暮らしのお年寄りの安否や健康状態を映像で確認する見守りシステム、買い物へ出かけるのに不便な方が食料品などをインターネットで購入できる便利な買い物システムなど、高齢化に対応したITの活用は、どんどん広がりを見せています。

最近、お年寄りを中心とする、いわゆる「買い物難民」を対象とした徳島発のサービス「とくし丸」が全国で広がっています。徳島の（株）キョーエイをはじめ、全国の地域スーパーと連携し、店から商品を調達して個人事業主が軽トラックで玄関先まで届けるサービスで、高齢者の見守りなども行っています。また、2020年に入り新型コロナウイルスの感染が国内で拡大し、外出自粛の動きが強まった際には、全国各地で重要な役割を担いました。なお、とくし丸というネーミングは、徳島と、社会奉仕や慈善事業に熱心な人を意味する篤志家とくしかをかけたものです。

●全国から注目される過疎地に

過疎地域とは、人口の著しい減少に伴って、地域社会における活力が低下し、生産機能および生活環境の維持が困難になっている地域のことです。

県内で過疎地域に指定されている市町村数は13、その割合は全市町村の54%（全国48%）、人口の割合は15%（同9%）、面積の割合は72%（同60%）で、過疎化が進んでいます。

しかし、徳島の過疎地域には全国的に注目され海外からも視察に来るような、文字どおり過疎化対応の「先進地域」といえる地域があります。そこでも、全国屈指のブロードバンド環境が一役買っています。

●先進的なIT企業やクリエイターが集まる町、神山

NHKテレビの全国番組で、若者が清流の中にある岩の上に座ってパソコンで仕事をしている映像が流れたのは、大きなインパクトがありました。この場所が、人口約5300人（2015年）の神山町です。

神山には、全国的に有名なIT企業やクリエイターたちが続々と集まってきています。たとえば、縁側えんがわのある築90年の古民家を改造し、最先端の情報機器を使った現代的なオフィスで4Kや8K映像の製作やメディア保管などを行っているのが「えんがわオフイ

ス」です。他にも、NHK大河ドラマ「八重の桜」のタイトルバック映像をつくったドローイングアンドマニユアル(株)やコンピュータ上で名刺情報を管理する会社で、約7000の企業がサービスを利用しているSansan(株)などが神山にサテライトオフィス(企業などの本拠から離れた所に設置されたオフィス)を開設しており、町内や県内の人たちの雇用を創出しています。

なぜ徳島の過疎の町に先進的な企業が集まってくるのでしょうか。早くから県下全域に光ファイバー網が整備されてきたことに加え、帯域に非常に余裕があることから、都会に比べ、安定して10〜50倍の通信速度が出るため、仕事が効率的にできることが一つの理由です。

さらに、神山には進出した人たちを支える強いソフト力があり、これを主に担っているのがNPO法人グリーンバレーです。サテライトオフィスの誘致活動や事務所、住居に使う空き家の紹介など多岐にわたる



えんがわオフィス ©(株)プラトリーズ

移住支援、地元の人たちとの交流の場の提供など、きめ細かな活動を行っています。

グリーンバレー理事の大南信也さんの口ぐせは「やったらええんちゃうん」。Just Do It! の精神です。その精神の下、グリーンバレーは、1999年から国内外の芸術家を招き、地域住民と交流しながら創作活動をしてもらう「神山アーティスト・イン・レジデンス」事業を続けています。神山にはよそ者を温かく迎え入れる文化が根づいているのですね。

日本全体の人口が減少する中で、過疎地が生き残っていくためには、クリエイティブな人や若い人の比率を高め、人口構成の健全化を図ることが大事という「創造的過疎」を大南さんは提唱し、取り組みを進めています。たとえば、2015年に町民同士が何度も話し合った内容をもとに、「まちを将来世代につなぐプロジェクト」がつけられました。このプロジェクトでは、「食」や「住まい」などを通して、地域内で経済をまわす仕組みをつくらうとしています。

また、町内から社会に変化を生み出す人材、「野武士型パイオニア」を世に送りだそうと、グリーンバレーやサテライトオフィス開設企業の社長、行政などが共同で「神山まるごと高専プロジェクト」を2019年6月に立ち上げました。「神山まるごと高専」は2023年4月開校に向け準備中です。校長には(株)ZOZOテクノロジーズ取締役の大蔵峰樹さんが決まっています。



ところで、サテライトオフィスの開設の動きは県内各地に広がっています。県南部の美波町では、IT企業を中心に、20社（2020年10月末現在）の企業が開設しているほか、県西部の三好市や美馬市でもいろいろな業種の企業が進出しています。現在、徳島県には16市町村、72社（2020年10月末現在）のサテライトオフィスが開設されています。総務省の調査によると、徳島県のサテライトオフィス開設企業数は2019年度末時点で北海道に次ぐ全国2位となっています。

●葉っぱがお金に化ける町、上勝

阿波の狸伝説ではあるまいし、葉っぱがお金に化けるの？と思うかもしれませんが、「おぼあちゃんたちの葉っぱビジネス」で全国的に有名になったのが、人口約15000人の上勝町です。山は桜や柿、紅葉など四季折々の樹木で彩られています。

仕掛けたのは、現在の「(株)いろどり」の社長である横石知二さんです。当時農協職員だった横石さんは、大阪の寿司屋で隣のテーブルにいた若い女性客た



つまもの ©(株)いろどり

ちが、料理の皿についてきた青もみじを見て、「きれいね!」「ハンカチにはさんで持って帰ろう」と話していたのを聞き、「これはビジネスになる」とひらめいたそうです。

料理を引き立てるために添えられる葉っぱを「つまもの」と言いますが、最初はまともに取り合ってくれなかった地域の人たちを説得し、1986年につまものの生産、販売を行う「葉っぱビジネス」を事業化し、1999年に(株) いろどりを設立しました。

当初は山に自生する葉を摘むだけでしたが、現在は多くが露地やハウスで自家栽培したもので、高品質・安定供給を維持しています。それらを支える仕組みとして、多品種少量の出荷を短時間で行う、ITを活用した商品管理システムが確立されています。

農家のおばあちゃんたちがパソコンやタブレット端末を使って商品の受注や出荷などを行っているのも画期的です。

上勝で生まれ育ち、都会で働いた人が再び戻ってくるUターンや、都会出身の若者たちが上勝に移って定住するIターンも増え、お年寄りたちとの交流も盛んです。

また、上勝町は、高齢化率県内1位(2015年)ですが、葉っぱビジネスのおかげで、生涯現役として元気に働いているお年寄りが多く、医療費が非常に少ないのが特徴です。地域おこしや高齢化社会の理想的なモデルケースとして全国から注目を集めていて、葉っぱビジネスの軌跡は映画やテレビドラマにもなりました。

2012年に公開された映画のタイトルは「人生、いろどり」です。おばあちゃん役で、吉行和子さんや中尾ミエさん、富司純子さんらが出演されました。

仕掛け人の横石さんのモットーは「人はだれでも主役になれる」です。いい言葉ですね。もう一つ、上勝町の取り組みで注目されているのが、ごみの再利用・再資源化を進める「ゼロ・ウェイスト」活動です。町民が協力してごみの焼却、埋め立て処分を極力少なくする取り組みを行っており、世界中から注目されています。

●古民家を再生した宿が人気の祖谷、三好・落合集落

東洋文化研究者として有名なアレックス・カーさんは、1971年にヒッチハイクで日本全国をまわっていたとき、たまたま祖谷を訪れ、墨絵で描かれた中国の桃源郷のような美しい風景に魅せられました。そして、まだ学生でしたが、借金をして茅葺き屋根のいろりのある古民家を買って、「簾庵」と名付けました。

「簾」とは笛のことで、日本文化に造詣の深いカーさんらしいネーミングです。

カーさんはこの築300年の古民家を、昔の素材やその家の歴史、そして伝統的な生活様式を残しながら、床暖房やシステムキッチン、ひのき風呂や水洗トイレなどを備えた快適な宿泊施設に再生しました。

また三好市は、東祖谷の落合集落（国の重要伝統的建造物群保存地区）の古民家を、カーさんの設計・監修で宿泊施設に改修しました。散策ツアーや祖谷そばづくり、畑仕事などの体験プログラムも充実しています。

祖谷は日本の原風景で、昼は鳥の鳴き声がかどまし、夜は満天の星が見られる別世界です。溪谷が深く、谷間から霧がわき上がってくる祖谷のことを、カーさんは仙人の世界だと表現しています。

こうした魅力に惹かれ、交通のとても不便なところでありながら、海外からもたくさんの方が訪れています。



麓庵 ©麓庵(有)

